

研究ノート

「ロミオとジュリエット」 映画化された3作品の比較

小林 康 男

1. はじめに

シェイクスピアの劇作品は37作品とも38作品とも考えられているが、舞台上で上演された回数はこれまで恐らく数え切れないであろう。さらに舞台以外にも、映画化やオペラ化された作品も多く、実に華やかにシェイクスピア作品は取り上げられている。忠実に劇作品を上演することはもちろんのこと、翻案された作品の舞台化、あるいは翻案された作品の映画化は、実によくある。この小論では映画化された「ロミオとジュリエット」を3作品とりあげ、その比較をしたい。

これまで映画化された主なものは6作品ある。

- ① 「ロミオとジュリエット」 ジョージ・キューカー監督、1936年、アメリカ、
R (ロミオ)：レスリー・ワハワード、J (ジュリエット)：ノーマ・シアラ
ラー
- ② 「ロミオとジュリエット」レナート・カステラーニ監督、1954年、イギリス、
R：ローレンス・ハーヴェイ、J：スーザン・シェントール
- ③ 「ロメオとジュリエット物語」レオ・アルンシュタム、レオニード・ラ
ブロフスキー監督、1954年、旧ソ連、R：U・シダーノフ、J：ガリーナ・
ウラノワ
- ④ 「ロミオとジュリエット」リカルド・フレタ監督、1964年、イタリア、
R：ジェロニモ・メニエル、J：ローズマリー・デクスター

- ⑤「ロミオとジュリエット」フランコ・ゼフィレリ監督、1968年、イタリア、
R：レナード・ホワイティング、J：オリビア・ハッセー
- ⑥「ロミオ+ジュリエット」バズ・ラーマン監督、1996年、アメリカ、R：
レオナルド・ディカプリオ、J：クレア・デインズである。

ここでは②、⑤、⑥の作品を取り上げることにする。というのはこれらの作品のDVDが入手しやすく、誰でも鑑賞が容易だからである。筆者にとって、⑤と⑥の2作品は、映画が公開されたとき、映画館に行って観ている。②を選んだ理由はカステラーニ監督の名前をこれまで、シェイクスピア作品を読んでいるときに、聞いたことがあり、またDVDの入手が可能であったからである。

カステラーニ監督の②は今から54年も前に作られていて、どんな作品か非常に興味が湧いたことは事実である。また⑤や⑥の作品との比較には相応しいのではないかと考えた。というのは第二次世界大戦後、9年後の1954年にどのように「ロミオとジュリエット」が解釈され、映画化されたかを知りたいと思ったからである。

3作品の比較の方法をここで述べておきたい。3作品が原作と場面展開がどう違うかを一覧表にまとめてみた。この表は物語の進行が原作と比較して同じならば○、違う場合は×をつけた。ここで比較するテキストは、Peter Alexander版（1951）を基にして作成された大修館シェイクスピア双書の岩崎宗治編注『ロミオとジュリエット』（1988）である。

2. 3作品の原作との比較

3 映画作品比較		②	⑤	⑥
		1954年 (141分)	1968年 (138分)	1996年 (121分)
プロローグ		○	○	○
第1幕	第1場	○	○	○
	第2場	×	○	○
	第3場	○	○	○
	第4場	○	○	○
	第5場	○	○	○
第2幕	プロローグ	×	×	×
	第1場	○	○	○
	第2場	○	○	○
	第3場	○	○	○
	第4場	×	○	○
	第5場	○	○	○
第3幕	第6場	○	○	○
	第1場	○	○	○
	第2場	×	×	○
	第3場	○	○	○
	第4場	○	×	○
第4幕	第5場	○	○	○
	第1場	○	○	○
	第2場	○	○	○
	第3場	○	○	○
	第4場	×	○	×
第5幕	第5場	○	○	×
	第1場	○	○	○
	第2場	○	×	×
	第3場	○	○	○

上記の表から分かることは、3作品とも原作に忠実な場面展開をしていないことが分かる。舞台では考えられない展開である。映画では撮影上、場面展開を原作に忠実に出来ないことも考えられるし、監督の考えにより、原作にない場面を入れたり、削除したりということがよく行われる。翻案された映画は原作の場面展開とは多少異なるのである。

3. 原作と異なる場面

カステラーニ監督作品②から原作と異なる場面を引用してみる。

第4幕1場最後の場面で修道士ロレンスは、「わしはいそぎで、使いの修道士に手紙を持たせてマンチュアのお前の夫、ロミオのもとに」と言ってジュリエットがこれから仮死状態になり、ロミオはキャプレット家の霊廟でジュリエットの目覚めを待つことを伝える大切な手紙を送ることを伝えている。実際はこの手紙が届かず、第5幕2場で修道士ロレンスの「マンチャアからよくもどられた。ロミオはなんと？／思いが手紙に書かれているなら、その手紙を」、すると修道士ジョンが「それが、実は道連れにと思って／同門のさる托鉢修道士を捜しに行きました。／この町の病人を見舞いに来ていたところを／捜しあてたそのとき、町の検疫官に、／われわれ両人が伝染病におかされた／患者の家にいあわせたと疑いをかけられ、／戸には封印、すっかり足留めをくわされ、／マンチュアへの急ぎの使いを果たせませんでした」という。

この場面をカステラーニ監督は、修道士ジョンの語る内容とは多少異なる場面を映画の中に創作している。マンチュアに到着した修道士ジョンが病人を見てほしいと病人の身内の女性から頼まれ、医術に心得のあるジョンは親切にもその病人を診てあげることにする。するとこの病人はペストに罹かっていることが分かる。ペストに罹かった病人を診たということで、修道士ジョンは病人の家に閉じ込められる。その結果修道士ロレンスの手紙がロミオに届かないというシーンを3,4分もかけて撮っているのである。このシーンなどはカステラ

一ニ監督の意図がよく理解できる場面になっている。この「ロミオとジュリエット」の悲劇の大きな要因に手紙が届かなかったことを挙げていると考えられるのである。もちろんこの物語はプロローグで結末は明かされていて、二人が死をもって幕が閉じられることを知っているが、それでも、手紙が届いていたらという観客の思いがこめられた演出を、監督は選択しているように受け取れるのである。

4.1 3作品の演出比較（バルコニーシーン、ロミオとジュリエットの位置関係）

それではここで、いくつかの有名な場面を3作品の映画ではどのように演出されているか、取り上げることにする。「ロミオとジュリエット」で最も有名な場面と言えば、第2幕第2場（バルコニーシーン）である。

②のカステラーニ監督の演出は、ジュリエットが2階のバルコニーに現れ、ロミオは2階に続く階段の中ほどに位置している。というのは階段の中ほどの鉄格子が、2階に上がれないよう閉じられているからだ。二人の対話はジュリエット（2階）とロミオ（階下）という位置関係ではない。ジュリエット（2階）とロミオ（1階半）という位置関係で、対話の流れは上下ではなく、斜めに交される。この位置関係は二人の台詞を考えた時、筆者は賛成しかねる。というのはジュリエットの台詞が階下に向かって降るかのごとく、詠われるように感じるからである。例えばジュリエットの「もしあなたの愛のお気持ちがまことのものであり／結婚ということを考えてくださるなら、明日／どこで、いつ、式をあげるか知らせてください。／私は私のいっさいをあなたにさしあげます、／私はどこへでもあなたのあとについて行きます」という台詞は、いかにもジュリエットの心情を直截に吐露したもので、まさに2階から階下のロミオに降り注いでいる台詞と思われる。ジュリエットの愛から結婚へという具体的な性急な思いは、まさに2階から階下のロミオの心に直接突き刺さるが

ごとくである。

ではロミオの台詞はどうであろうか。ジュリエットとは対照的に、逆に階下から真上（2階のジュリエット）に向かって駆け上がるような響きがあり、若者の恋心を象徴する台詞に溢れている。例えば、「恋の軽い翼でこの塀を飛びこえました、／石垣などでどうして恋をしめ出せましょう。／恋がなしうることならどんな危険も恋はおかすもの、／この家のものがどうして僕を妨げられましょう」というロミオの台詞は、若者の恋情を遺憾なく表している。二人の位置関係は、やはり2階と階下でなければと思う。そのことをロミオとジュリエットの台詞を通して言えるのではないだろうか。

次に⑤のゼフィレリ監督の演出はどうであろうか。この映画の演出は、カステラーニ監督より、原作に忠実に描いている。ロミオが塀を越えて、鬱蒼とした木々の間からバルコニーを見上げるとジュリエットがバルコニーに現れる。またバルコニーに近づけるように木々が建物を取り囲み、ロミオはバルコニーに移ることはしないが、木の上や、バルコニーの外壁にへばりついてジュリエットと抱擁を繰り返す。この位置関係なら、筆者は二人の台詞が自然に入ってくると感じられた。演出としては実に見事である。この場面は約11分間も続き、全編ゆったりとした動きのカステラーニ監督の約9分を超えている。スピード感では断然カステラーニ監督より速いが、この場面は時間をしっかりとって巧みに演出している。ゼフィレリ監督のこの場面に賭ける意気込みが理解できる。

最後に⑥のラーマン監督の二人の配置はどうであろうか。キャピレット家の宴の後、塀を超えジュリエットの部屋の真下に忍び込んだロミオは、ジュリエットがバルコニーに出てくるのを待つ。しかしジュリエットはロミオが隠れているプールのある裏庭に出てくる。そこでロミオと彫像を隔ててジュリエットは、「おお、ロミオ、ロミオ！ どうしてあなたはロミオ？」と独白をする。そして「ロミオ、その名をおすてになって、／あなたとかかわりのないその名

をすてたかわりに、／この私を受け取って」と語ると、真後ろにいたロミオが「受け取ります、おことばどおり」と答え、二人は同時にプールに落ちる。プールの中での愛の対話は、斬新な演出と言えるが、同じ高さの位置関係に、台詞の効果に疑問が残る。因みにこのシーンは約9分でカステラーニ監督の②と同じ長さである。

4.2 3作品の演出比較（キャピュレット家の霊廟、青年貴族パリス）

物語の最後を飾る5幕3場は、キャプレット家の霊廟が舞台である。原作ではパリスがジュリエットの眠る霊廟に侵入して、そこでロミオに遭遇し、二人は戦い、ロミオがパリスを殺すことになる。しかしこの原作に忠実だった演出は②のみで、⑤や⑥はパリスを登場させていない。⑤や⑥では、ロミオとジュリエットが死を迎えて、この物語は終了する。舞台上演でもパリスが登場しない演出は幾つか筆者は観ている。筆者は賛成しかねる。というのはロミオの親友マーキュシオはティボルトに殺され、そのマーキュシオの敵打ちをロミオがしたと考えられ、この状態でロミオがジュリエットと死を迎えることに多少の受け入れがたさを感じるのである。しかし罪のないパリスと戦い、殺してしまうロミオなら、ジュリエットと共に死を迎えることにより共感が持てると筆者は感じる。二人が死すべく定められていたとはいえ、ロミオがパリスも殺害したのであれば、二人の死を観客はより受け入れやすいと筆者は思うのである。どうしてもパリスには登場してもらい、ロミオと戦い、殺されなければならないと思う。

5. 3作品のロミオ役者とジュリエット役者の演技力

カステラーニ監督作品

②のロミオ役はローレンス・ハーヴェイで、ロミオ役を26歳で演じている。舞台俳優というしっかりとした経歴をもち、ロミオ役を上手に演じている。しかし監督の考えと思われるが、残念ながらブランクバースを高らかに詠ってい

ない。容姿といい、演技といい、申し分のないロミオ役者と思われるが、台詞の言い回しにはがっかりである。また他の2作品と比べて年齢がロミオに相応しいか疑問である。役者は確かに年齢を超えて演技をするが、やはりローレンス・ハーヴェイ（26歳）のロミオでは、澁刺さに欠け、筆者のロミオ像とはかけ離れている。

②のジュリエット役スーザン・シェントールは公募で選ばれた19歳の金髪の美しい女性である。少女というより、大人の女性という雰囲気が強く、原作の14歳の少女という感じがまったく感じられない。さらに全編を通して台詞を聞けば分かるが、役者としては、まだまだこれからである。容姿から選ばれたことから分かるように、カステラーニ監督は高い演技力を要求していないように感じられる。美しい衣装を身に纏い、美しい容姿でジュリエットを無難に演じているという印象である。

ゼフィレリ監督作品

⑤のロミオ役は18歳のレナード・ホワイティングが演じている。ロミオ役に求められる気品、甘い顔立ち、時に物憂げな表情、すらりとした容姿を備えていて、まさに理想的なロミオ役と言える。台詞のブランクバースは聞く者の耳に心地よく、若さからくる未熟さを感じさせない。ゴールデングローブ賞新人賞を受賞したことも頷ける。観客を魅了する確かな演技力も持ち合わせていた。ゼフィレリ監督が3ヶ月以上かけて300人の中から選んだだけのことはある。筆者がこれまでに観てきたロミオ役者の中ではレナード・ホワイティングの右に出るものはいないと思う。

⑤のジュリエット役は15歳のオリビア・ハッセーが演じている。スーザン・シェントールとは対照的なジュリエット像をゼフィレリ監督は登場させた。金髪の大人の雰囲気を漂わせる美人、スーザン・シェントールに対してオリビア・ハッセーは、長い黒髪、つぶらな瞳、東洋的な美少女である。ドラマスク

ールで学び、ロンドンの舞台に立っているところをゼフィレッリ監督に見出されたということだが、ブランクバースの台詞回しは決して上手とは言えない。監督はこのことを十分承知の上でジュリエット役を与えたと考えられる。撮影技術を駆使して、オリビア・ハッセーの魅力を遺憾なく発揮するように演出していることからそのことは伺える。演技力の未熟さを補って余りある魅力をオリビアは持ち合わせていたと言える。

ラーマン監督

⑥のロミオ役はレオナルド・ディカプリオで、演じた時の年齢はディカプリオ22歳であった。原作の年齢に比べると多少年齢を重ねているが、端正な顔立ちと優雅な身のこなしで、ラーマン監督が考えるロミオ像にぴったりである。ラーマン監督は、始めにディカプリオのロミオ役ありきで、この映画を撮ったと言われている。その監督にディカプリオは見事に応え、ベルリン国際映画祭で主演男優賞を受賞している。まだまだ若いが見事な台詞回しである。テンポの速い場面展開に、ディカプリオは細身の体で自在に動き回り、ラーマン監督の考えるロミオ役を完璧に演じきっている。アメ車の運転に銃の撃ち合い、まさに現代版ロミオの魅力を遺憾なく発揮して、多くの若者の心を捉えた役作りに成功している。

⑥のジュリエット役は、ラーマン監督が「すさまじいまでの世界規模のオーディションで、やっとクレア・デインズを探し当て、会って一目で魅了された」と言うように、17歳にして、演技力は確かなクレア・デインズが演じている。テレビドラマ「アンジェラ15歳の日々」でゴールデングローブ賞主演女優賞を受賞していることから分かるように、若くして、演技力は抜群。特に印象に残るのは最後の場面、ロミオが銃で頭を撃った後、眠りから覚醒し、一人取り残されて、絶望感とやるせなさを表現した演技力に感動させられた。観客の脳裏に深く沁みこみ、決して忘れられない場面になった。オリビア・ハッセー

のジュリエット役とは一味違う、ジュリエット像を見事に演じている。

6. まとめ

まず上映時間から言うと、②は141分、⑤は138分、そして⑥は121分で、最もスピード感溢れる演出はラーマン監督作品ということになる。これは上映時間が短いからということだけではない。場面展開の速さは、アメ車使用や、銃撃の応酬、ヘリからの撮影など、現代を作品の中に持ち込み、スピード感を上げている。ラーマン監督は68年の⑤の作品以降約30年近くも、この「ロミオとジュリエット」が映画化されていないのは、⑤の作品の完成度の高さが、撮ることを躊躇させている、と考えたのではないだろうか。そうであるならば、②や⑤（イタリアを舞台にして、中世を再現した「ロミオとジュリエット」作品のこと）の延長線上の映画化はできないと、考えても不思議ではない。全く違った「ロミオとジュリエット」を撮ってみたいと考えたのであろう。それが現代を作品の中に持ち込み、②や⑤とは全く異なる作品を創り上げることであった。ラーマン監督の作品は興行成績からも大成功し、②や⑤とは全く違う、監督独自の「ロミオとジュリエット」作品になっている。

映像の美しさでは3作品とも遜色はないと筆者には感じられる。それぞれ1カットの美しさはそれぞれ見応えがある。特に②の作品は全編、イタリア絵画の世界から飛び出してきたかのような色彩感溢れる場面が頻出している。⑤もイタリア各地の素晴らしいロケ地を選び、実に美しい場面が続く。⑥はよくオペラ的と賞賛されるが、その際たるものが仮面舞踏会である。色鮮やかな衣装と躍動感あふれる音楽に観客は酔いしれる。

2010年というこの時に、3作品の優劣をつけることは出来ない。しかし、②のゆったりと時間が流れる中でのストーリー展開は、1950年代だから可能であり、また観客の中世イタリアという時代に生きた、「ロミオとジュリエット」の物語を観たいという要望と、ピタリと合致したのである。カステラーニ監督

の目指した、舞台はイタリア、時代は中世、は大成功である。事実この作品で、1954年にヴェネツィア国際映画祭の最高賞である、金獅子賞を受賞していることからそう考えていいのではないか。歓迎される下地があったからこそ成功である。しかし現代に生きる筆者には、実に退屈なストーリー展開であることを告白せざるをえない。

しかし14年後には⑤が撮られることから分かるように、やはり②のあまりのスローテンポなストーリー展開には、魅力を感じない観客がいたことも考えられる。そこで⑤の登場となるのである。ゼフィレリ監督は、舞台はイタリア、時代は中世を踏襲した。しかし、役者の年齢は原作に近づけ、若さを強調して、スピード感溢れる物語を作り上げることに成功したのである。②の良さを踏襲しながら、ゼフィレリ監督独自の「ロミオとジュリエット」の世界を創りあげること成功した。特に、衣装、音楽、舞踊は観客の脳裏から離れないのではないか。⑥はこれら②と⑤とは決別してラーマン監督独自の「ロミオとジュリエット」を生み出すことにこれまた成功している。次にどのような「ロミオとジュリエット」作品が生まれてくるか筆者は大いに楽しみにしている。

参考文献

狩野良親 『シェイクスピア・オン・スクリーン』 (三修社, 1996年)

ロジャー・マンヴェル 荒井良雄 (訳) 『シェイクスピアと映画』 (白水社, 1974年)

岩崎宗治 (編注) 『ロミオとジュリエット』 (大修館シェイクスピア双書, 大修館, 1988年)

ウィリアム・シェイクスピア 小田島雄志 (訳) 『ロミオとジュリエット』 (白水ブックス, 1983年)

スタジオ・ジャンプ (編集) 「ロミオ+ジュリエット」 (東宝出版, 1997年)

参考サイト

<http://ja.wikipedia.org/wiki>